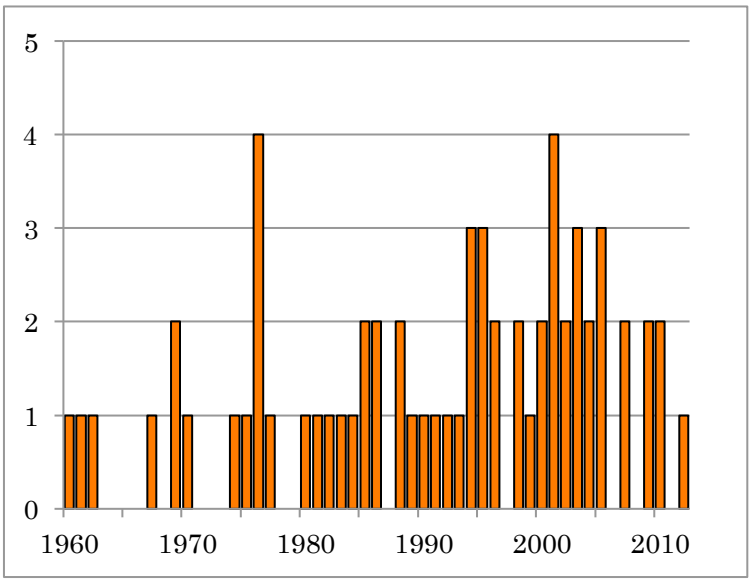
科研「フィールドワーク方法論の体系化」

2013/3/21 呉羽正昭

観光地理学におけるフィールドワーク

1960 年以降の観光地理学研究におけるフィールドワーク

J-Stage および CiNii で「地理」と「観光」,「ツーリズム」, または「宿泊」との組み合わせをキーワードとした検索に該当した研究を対象とした。今回の分析は, そのうち地理学評論（英文誌含む）および人文地理誌に掲載された論文のみの分析結果である。対象論文は上記に該当する 64 件のうち, 4 件の展望論文を除いた 60 件である。



64 件の刊行年分布

そのうち対象が海外に関する研究は 12 件に達し, 全てが 1992 年以降に出現している。また, 調査対象地域のスケールは, ローカル（市町村レベル以下）38 件, 中間（地方レベル程度）5 件, ナショナル 17 件であった。

フィールドにおいてオリジナルなデータを得る方法として最も多くみられたものは, 聞き取り調査（44 件）で, 次いで土地利用調査（20 件), アンケート調査（7 件）であった。また, 現地でしか得られない統計や文献, 地籍図等の資料収集も重要であろう。

聞き取り調査を実施した研究は 44 件で, その対象は次の通りである。

公的機関（都道府県庁, 市町村役場など）
関連団体（観光協会, 旅館組合, ヨットクラブ
観光施設（旅館, 民宿, 土産物店, 観光農園, スキー場など）
旅行会社
観光関係専門家

訪問者

アンケート調査は 7 件の研究で実施されたが，その対象は次のように非常に多様である。

訪問者（観光者，旅館宿泊者）

観光関連施設（宿泊施設など）

顧客（案内所名簿から）

観光地域の住民

一般住民（小学生の家族（の旅行先），リゾートクラブ会員）

一方 GPS を利用して観光者の行動パターンのデータを得た研究が 1 件あり，そこでは動物園の訪問者に GPS 機材を渡し，彼らが園内をどのように回遊するのかについての空間データを取得している。

その他の分析資料としては次のようなものがあった。

さまざまな地域スケールの観光関連統計（国鉄利用者統計，観光客入り込み数，宿泊客数，宿泊施設数など）

その他の統計（人口，事業所統計）

電話帳

既往研究，郷土史，新聞

ガイドブック，旅行雑誌，観光パンフレット

パッケージツアーのリスト・内容

雑誌投稿欄言説，小説

地籍図・土地台帳

観光地理学の研究動向とフィールドワーク

日本における観光地理学の研究に関する展望論文は複数ある（青木・山村，1976；Takeuchi, 1984；Ishii and Shirasaka, 1988；鶴田，1994；Kureha, 2010；呉羽，2011）。これらで指摘されてきたことは，観光目的地に関する研究が卓越することである。一方で，目的地についてもそのイメージを捉えようとする研究，目的地が有する結節点としての性格に注目した研究，目的地の風景に関する研究なども現れてきた。また，ルーラル・ツーリズムやエコ・ツーリズム，まちなみ観光などの新しい観光行動パターンが出現するとそれに対応する研究も増えつつある。さらには，外国の観光目的地への注目も高まっており，外国人による国際観光，日本人による国際観光も新しい研究課題になっている。

こうした研究内容の変化と連動してフィールドワークの内容も変化してきた。ローカルな地域スケールで観光地域の形成を分析することが主流であった時代には，温泉旅館経営の変化，温泉所有の変化，土地利用と景観の変化，生業・就業構造の変化等に関するデータをフィールドワークを通じて取得していた。こうしたフィールドワークでは，現地の有力者や観光関連施設等での聞き取り調査が重要な役割を持つと同時に，観光地域の土地利用と景観やその変化を解明するために土地利用調査が実施された。また，それらの結果により厚みを持たせるために

既存の統計や地籍図等の資料で補足することが行われた。さらには，現地でしか得られない統計や文献を収集することが必要で，短時間で当該資料にたどり着き，それらも参照しながら聞き取り調査や土地利用調査を実践することが重要である。

過去約 20 年で，観光地理学の研究対象はかなり多様化してきた。とくに，観光者の行動に焦点を絞った分析視点が重視されつつある。いわゆるオルタナティブ・ツーリズムが重要になり，観光者に関するデータをいかに収集するのかが研究の独自性を高めるのに必要であるためである。かつては，観光行動については，観光施設関係者等から間接的に聞く方法がとられてきた。たとえば民宿で顧客の季節性や属性などを聞き取ったり，大規模旅館から集計データを提供してもらったり，宿帳を閲覧して集計していたのである。しかし，これではデータの信憑性に問題があり，また個人情報保護のためにデータを得ることが困難になってきた。それゆえ，訪問者から直接聞く方法が重視されつつある。しかし，多くの研究ではこの方法がとられていない。調査期間が限られていたり，観光目的地で寛いでいる観光者に対して，詳細な対面調査をすることが困難であるためである。これに代わり，観光者の行動パターンをみるために，既存の別の資料を利用する分析が増えている。たとえば，ガイドブックは多くの観光者が利用するものであり，観光者はそこに記載されている目的地に滞在することを前提として，観光者の行動パターンを推測することができる。同様に旅行雑誌や観光パンフレットも使用できるし，旅行会社で販売されるパッケージツアーのリスト・内容も重要な資料として使用された。つまり，観光情報をデータとして分析する研究が増えており，今後は人びとがネット上の観光情報を利用する場合が増えることが予想され，これをいかに分析するのかという視点も重視されよう。

行動空間の地域スケールと観光目的地の性格によっては，GPS も有効である。さらには特定もしくは一般の人びとに対して過去の経験を尋ねる方法もある。これは，たとえば過去 1 年間に行った観光旅行について，特定の地域の住民にアンケートを配布する方法である。その地域を出発地とする観光行動パターンの空間的特性が把握できるが，近年ではこの方法をとる研究はほとんど無い。

また，過去，とくに第二次世界大戦前の伝統的観光に関する研究も増えつつある。これらの研究において，分析の中心は既存資料を検討することにあり，多くの場合，フィールドワークの中心は資料の収集で，簡単な観察がなされる程度であろう。

今後も日本をめぐる観光の変化とともに，観光地理学の研究内容も変化することが予想される。そこでのフィールドワークがどのような内容を有するのかについても

文献

青木栄一・山村順次（1976）：日本における観光地理学研究の系譜．人文地理，28，171-194

呉羽正昭（2011）：観光地理学研究．江口信清・藤巻正己編『観光研究レファレンスデータベース』ナカニシヤ出版，11-20.

鶴田英一（1994）：観光地理学の現状と課題−日本と英語圏の研究の止揚に向けて．人文地理，46，66-84.

Ishii, H. and Shirasaka, S. (1988): Recent studies on recreational geography in Japan.

Geographical Review of Japan 61B, 635–659.
Kureha, M. (2010): Research trends in the geography of tourism in Japan. *Japanese Journal of Human Geography*, 62, 558-569.
Takeuchi, K. (1984): Some remarks on the geography of tourism in Japan. *Geojournal*, 9, 85-90.

観光地理学に関するフィールドワークによるデータ収集リスト（作成中）

聞き取り調査先
- 公的機関
  - 省庁
  - 都道府県庁
  - 市町村，広域連合
- 団体
  - 観光協会，観光連盟（観光協会連合会）
  - 旅館組合，民宿組合
  - 農協・漁協
  - その他の団体（ゴルフ場協会など）
- 個々の観光施設
  - 宿泊施設
  - 観光農園
  - 農産物直売所

観光者に対する調査
- 聞き取り調査，アンケート
- 関係者への聞き取り
- 既存データの使用

調査の時期
- 繁忙期（多忙であるが，観光施設関係者や観光者は存在）
- 閑散期（観光者は不在，観光施設関係者が不在のこともある）

2013 年度の予定

１．今回の分析結果をまとめ，IGU 京都会議で発表する。

２．海外でのフィールドワーク：オーストリアのリゾートにおけるフィールドワークの方法を検討する。その際，日本で行うフィールドワークとの差異，フィールドワークに関してオーストリアならではの特質，リゾート以外でのフィールドワークの特質などを考慮しつつ分析する。